

～あした、転機になあれ!～

笑いから... 楽さびら。

職場を元気にする哲楽レシビ その七

「社内報」のススメ

職場でどんな顔を
していますか?

「私は、笑顔を見るのが好きなんだ!」。そう気づいてから、笑顔オタクと自覚して、これまで以上に、さまざまな職場にうかがっては「この方の笑った顔を見せてもらおう!」と、好奇心いっぱい取り組むようになりました。

「紀々さんが来ると、みんなの顔がちがいます」と驚かれることは多いのですが、いつも残念に思っていたことがあります。それは、ご本人が自分のいい表情に気づいていないこと。こんなにいい笑顔だということと、ご本人にも見ていただきたいなど思っていました。

そんなとき、とある医療系フリーマガジンでインタビュ取材をするライターとしてのお話がありました。一番困ったのが、写真も撮ってくるといふ初挑戦。お話を聴く、文章を書くというのは、これまでの仕事にもありましたが、写真は、撮られる側の経験しがなく、しかも、とても苦手でカメラマン泣かせの被写体でした。

コンパクトデジカメをカバンに入れて体当たりで臨んだ初の取材は、テーマも大きく、文字数も多く…大苦戦! 自分の力のなさを痛感し、落ち込みました。ところが、思

いがけず再びチャンス到来。今度こそ、と気持ちを切り替え、写真の入門講座を受講し、「いいライターになる!」と誓いました。

写真もインタビュも、まずは場数が大事。自主練習をしよう!と思い立ち、自分のホームページで、さまざまなプロフェッショナルのお話と笑顔写真をお届けする「社外報!」を始めることにしました。

私がまず挑戦したのは「ハイ、チーズ」ではない、動きの中の写真を撮るといふもの。私が、いつも現場で見せてもらっている自然な笑顔や表情を、ご本人にも見てもらいたいと思ったからです。

新しい発見がある 部下へのインタビュー

「社外報!」の取り組みの中で、思いがけない発見がいくつもありませんでした。そこで私が思いついたのが、職場のリーダーが、自分のスタッフにインタビューしたらいいのでは? ということ。わかっているようでわかっていないその人の想いや、見ているようで気づいていない表情、聞いているようで聞けていない夢や目標など…インタビューしていく中で、多くの発見や感激があると思うからです。

普段の職場では、なかなか思い

きつて聞けないことでも、インタビュという名目があれば、聞ける。相手の方も、面談とかしこまってしまうけれど、インタビュなら話しやすい。ちよつときこちなくても、インタビュならそれもまた自然。職場でジッと部下を見つめるのは怪しいけれど、カメラを向けて「撮影」という名目があれば、職場での表情に注目することができ、発見がある。インタビュには、リーダーにとつてたぐさんのプラス要素があると感じています。

また、相手の話を「聞いているか」も、一目瞭然。相手の魅力を見つけたいという気持ちも高まり、いつもの会話や視点とは違う感覚で向き合うことが出来ると思うのです。感情や表情に意識を向けて、相手とコミュニケーションをとることができ、貴重なチャンスとなるのではないのでしょうか?

働く姿を写真で見ると、鏡で自分の顔を見るのともまた違います。「自分のいいところ」は、思っていた以上に自分ではわからないもの。だからこそ…第三者の出番なので、という気がします。

飲みニケーションが成り立ちにくく、と言われるようになった今、ビールよりもカメラを片手に、居酒屋での隣の席よりも、働く現場の隣の席の方が、本音も笑顔も自然に見せ

てもらえるかもしれません。職場に笑顔が生まれるきっかけづくりの一つとして、社内報を活用できるのでは…。紀々の「社外報!」で撮らせていただいた笑顔写真を眺めながら、そう感じていきます。

Aさんが笑顔になるのは、どんなときだろう? Bさんがイキイキ語るのはどんなこと? そして、あなた自身は?

あした…転機に、なあれ!

もっと...
話して聴いて
みませんか?



紀々(きき)

哲學家。那覇市出身。1998年に早稲田大学第一文学部哲学科東洋哲学専修を卒業。「自ら考え、自ら動く力を磨く社員研修」との依頼を受け、「哲楽のチカラを、笑顔のチカラに」をテーマに、さまざまな企業現場でサポートを行っている。特に「若手リーダー・女性スタッフがイキイキ元気に働ける職場づくり」を哲楽する研修は、好評。現在は、沖縄の表現で「Let's 哲楽」を意味する「哲楽さびら。」を合言葉に、沖縄発で職場に哲楽習慣・風土を広めるべく活動を展開中。